
プラトニックが死んだ日

蚊辺 コー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラトニックが死んだ日

【Nコード】

N8223Q

【作者名】

蚊辺 コー

【あらすじ】

生きる十七歳、死んだ二十五歳。

ママ

「ママ、もうお昼よ、ごはんはまだかしら」
「そこにあるでしょう」

くさい。女になればつく匂いってやつかしら。自宅を指すにはちよつとおかしいけれど、割と小綺麗なこの家になんでこの女が住んでいるのか、もう何年も謎のまま。

「またわたしにこんなものを食べさせるつもりなの？」
「うるさいわね、クソガキ」
「親らしくしなさいよ」

お皿にゴトンと固い麺を落として熱湯に浸す。この女がほんとうにわたしのママなのかわからない。だけど毎週変わるパパに比べたらよくこの家にいるから、まあママなんだろう。最近知り合って、性格もあわなくて、下品で媚しか売れない。わたしは、そんな女じゃないから、この女がどうして今までわたしを放っておいて今さらここへ帰ってきたのかわからない。でもたぶんお婆ちゃんが死んでしまったからだろうと、そんな気もする。身内はお婆ちゃんしか知らなかった。その人がわたしの家族だった。

「親らしくってねえ」
「シャワー浴びてよ、あの男の匂いがする」
「今更親なんてなれないでしょう、あたしのも作って」

だるそうに息を吐きながら言った女はソファから起き上がって浴室

へ行った。もうひとつ、カップ麺をつくる。わたしがいつでも、ふつこの十七歳でいられるママが欲しい。

麦稈

夏がきた。あの女がまた消えた。わたしのママが失踪した、とおじさんに伝えるとおじさんは家に呼んでくれた。家族じゃない、親戚じゃない、前のおうちでお隣さんだった、おじさん。わたしを育てるとお婆ちゃんのお葬式で言ってくれた。それを邪魔したママがわたしを置いてまた消えた。おじさんはわたしをおうちに招いて、紅茶をくれて、お婆さんも隣に座ってくれた。

「ここで暮らしてもいいのよ」

夢みたいに、ぼんやりとやさしい夫婦だった。世界中のこわいものを一瞬も見たことがないような、皺々の細い目で、すこし泣きながらわたしの手を握ってくれた。

「でもわたし、あの女を待たなきゃ」

「もうそんな辛いことはやめてしまいなさい」

「毎月欠かさずお金を贈って下さっているのはおじさま達？」

「黄不子ちゃんきぶこの大切な手を傷つけるわけにはいかない」

狂的な部分もあった。わたしがお婆ちゃんの家にお引越しをしようとお話したときも、私達は絶対に黄不子ちゃんの味方だよと肩を強く、つかまれた。この人たちはとてもいい人だけど、一緒に暮らすのはむずかしいかな、と警戒に思っていた。

「ありがとうございます、ほんとうに、助かっているよ」

「お婆様のご遺産は、いざと言うときの為に」

口元だけど緩めて、すうつと視線を横に流す。目に移ったのは広い居間と、壁にかけられた美しい網目の麦藁帽。そういえば、夏が来ていた。この家は空調が遠慮なく効いているからもう、そんなこと忘れてしまいそうだった。外はまぶしいほど明るいのに、この家の中はいつからか、時が止まっているようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8223q/>

プラトニックが死んだ日

2011年2月19日14時51分発行